

震災関連ドキュメンタリーの10年 —被災地・被災者の表象とテーマに関する内容分析を中心に—

古澤 健*
米倉 律**

1. はじめに

2011年3月の東日本大震災から10年の間に、震災をテーマにした膨大な数のテレビドキュメンタリー番組（以下、「震災関連ドキュメンタリー」）が制作され、放送されてきた。NHKと民放の代表的な定時のドキュメンタリー番組枠だけでも、その数は、『NHKスペシャル』（NHK）207本、『NNNドキュメント』（日本テレビ系列）114本、『テレメンタリー』（テレビ朝日系列）130本などとなっている。⁽¹⁾ これら以外のNHK、民放各局の定時枠の番組、および定時枠以外の番組（特番や単発の番組など）を含めると、この10年間に放送された震災関連ドキュメンタリーの数はゆうに1000本を超えと思われる。

では、これらの震災関連ドキュメンタリーは、この10年間、震災についての何をどう伝えてきたのだろうか。本稿は、震災関連ドキュメンタリーが映し出してきた被災地・被災者の表象、そして取り上げてきたテーマ等についての内容分析によって、その特徴や時期による傾向の変化を明らかにし、震災関連ドキュメンタリーの社会的役割や可能性、課題等について考察することを目的とする。

2. 先行研究と研究対象・方法

NHK、民放の各局は震災関連ドキュメンタリーを発生後の早い段階（数日～数週間以内）から放送していた。⁽³⁾ これらの番組は、ニュース・情報番組などと併せてテレビによる初期の震災報道の一部を構成する重要な要素であった（遠藤薫2012：200-202）。しかし、震災関連ドキュメンタリーが大きな力を発揮したのは、むしろ震災から一定の時間が経過して以降である。丹羽美之（2013）は、震災においてドキュメンタリーがその持続的報道や調査報道によって果たした役割を、次のように評価している。

一般的に、ニュースの記者は事件や事故が収束するとすぐに次の現場に向かう。しかしそこには必ず「忘れ物」が落ちている。ドキュメンタリー番組とは、そうしたニュースからの「忘れ物」を拾い集める営みとすることができる。今回の東日本大震災でも、ニュースからこぼれ

*ふるさわ たけし NHK高知放送局 副部長

**よねくら りつ 日本大学法学部新聞学科 教授

てしまうような様々な視点やテーマのドキュメンタリー番組が数多く作られた。それらの番組を改めて見直すことは、テレビ・ジャーナリズムの多様性を示すと同時に、忘れられた大震災の記憶を掘り起こすことにもつながるだろう（丹羽美之2013：360）。

この指摘は震災の2年後に記されたものだが、周知のとおり東日本大震災によってもたらされた甚大な被害からの復旧・復興のプロセスは、震災10年が経過した今も道半ばであり、なお終わりは見えない。そうした長い震災からの復旧・復興のプロセスのなかで震災関連ドキュメンタリーは、まさに「様々な視点やテーマ」で、被災地の状況や被災者の姿を映し出し続けてきた。

震災関連ドキュメンタリーのこの10年間の展開、動向については、すでに多くの先行研究がある。震災直後の数年間は、緊急報道、災害報道においてテレビが果たした役割やその限界、問題点などを、主としてニュース・情報番組を対象として分析・検証する研究が数多く行われるなか（NHK放送文化研究所2011ab、瓜2011、福田充2012、高野明彦・吉見俊哉ほか2012、伊藤守2012、山田健太2013など）、ドキュメンタリー番組を対象にした研究成果も次第に蓄積されていった（遠藤薫2012、丹羽美之・藤田真文2013など）。このうち遠藤薫の研究は、震災後半年の間に放送された主要ドキュメンタリー番組のテーマや表象、語りの特徴等を分析した先駆的なものである。遠藤は、NHKが震災をめぐるマクロな様相に着目する傾向が強いのに対して、民放は被災地・被災者に寄り添うアプローチに特色があること、NHK、民放共に自身の報道姿勢や国の原発政策との関わりなどについて自らを相対化する視線に乏しい点などを指摘している（遠藤薫2012：220-221）。また、震災後2年の間（2011～12年）に放送された番組を対象に分析した丹羽美之（2013）は、震災関連ドキュメンタリー番組の主要テーマは、①想定外の災害の実態の記録、②記者たちの驚きや戸惑い、③被災者への寄り添い、④巨大津波の教訓、⑤原発事故の原因・背景への問い、⑥復興への道のり、に分類されるとしている。

震災からの時間の経過に伴って、震災関連ドキュメンタリーを対象にした量的なアプローチによる内容分析も行われるようになった。その代表的なものが、NHK放送文化研究所の原由美子らによる一連の研究である（原由美子2015、2017、原由美子・大高崇2019）。このなかで原は、ニュース・情報番組と同様に、ドキュメンタリー番組においても放送本数が持続的に減少傾向にあると同時に、各年の3月に放送が集中する「3月ジャーナリズム」化の傾向や「語り」の定型化といった傾向が見られること等を指摘している。さらにこの時期には、膨大な数の震災関連ドキュメンタリーを、震災をめぐる多様な出来事や経験を記録したテレビ・アーカイブの中に位置づけ、例えば東日本大震災以前の原発事故（チェルノブイリ原発事故、東海村放射能漏れ事故など）などとも関連づけながら分析・検証するアプローチによる研究も始まっている（小林直毅編2018）。

2021年には、震災からの10年間というスパンで震災報道を検証する動きが各方面で活発に行われた（例えば、日本新聞協会2021、朝日新聞社2021、山口勝2021）。そうした中で日高勝之（2021）は、3.11後に原発事故を扱ったドキュメンタリーが一時的に原発の是非そのものを議題化するようになった点に注目しつつも、その後、番組のテーマが次第に「人間化、ローカル化、他者化」していったと指摘した。原発事故をテーマにした番組だけでなく震災関連ドキュメンタリー全体を分析するうえでも重要な指摘である。また、七沢潔（2021）は、2021年前半（1～7月）にNHK、民放が放送した原発事故関連のドキュメンタリー40本を分析し、各番組が原発事故による被害や教訓の

「他人事」化に抗うために様々な努力をしている点を評価しつつ、他方で日高の指摘同様に、原発政策自体のあり方を問うような番組の不在を批判している（七沢潔、2021：52）。

以上のような先行研究の知見を踏まえ、今回は二つの分析を行った。第一は、『NHKスペシャル』の内容分析である。前述のとおり、震災関連のテーマを扱った『NHKスペシャル』は207本に上る。この207本を対象に、内容やテーマの特徴、10年の間の傾向の変化を中心に分析した。震災関連ドキュメンタリーのなかで『NHKスペシャル』を対象としたのは、①各局の定時番組なかでも最も本数が多く、またテーマも多岐に渡っており、その意味で震災関連ドキュメンタリーを代表する番組であること、②震災直後から現在まで継続的に制作・放送されているために、時期によるテーマや内容の特徴、傾向の変化を観測しやすいこと、③今後行う予定にしている他の番組枠との比較、NHKと民放各局の番組との比較を行ううえでの基礎資料となり得ること、等の理由による。分析の第二は、NHKと民放が2021年3月に放送した震災関連ドキュメンタリーを対象としたものである。「震災10年」の節目にあたった2021年3月には、NHK、民放が数多くの震災関連ドキュメンタリーを放送した。その数は、定時枠の番組（地上波・全国放送）に限っても22本あった⁽⁴⁾。これらの番組のなかには、震災から10年が経過した被災地・被災者の状況を総括的に伝えるものや、この10年を時系列で振り返るものが多く含まれており、各局の震災関連ドキュメンタリーの傾向や特徴をよく表している。そこで、この22本の番組が「震災10年」をどう表象したのかについて、番組に登場する地名や人物、NHKと民放の差異などを中心とした内容分析を行った。

以下では、前半で『NHKスペシャル』についての分析結果を説明し（3節）、後半で今年3月に放送された震災関連ドキュメンタリーについての内容分析の結果を記述する（4節）。そして最後に、全体の総括と震災関連ドキュメンタリーの社会的役割や可能性、課題などについて考察する（5節）。

3. 震災関連ドキュメンタリーの10年の変遷～『NHKスペシャル』を中心に～

本節でははじめに、NHKと民放の主要なドキュメンタリー番組のなかで、この10年に震災関連番組がどのくらい放送されてきたのかを概観する。その上で、『NHKスペシャル』に絞って、その内容についてより詳しい分析を行う。

(1) NHKと民放の主要ドキュメンタリーの概要

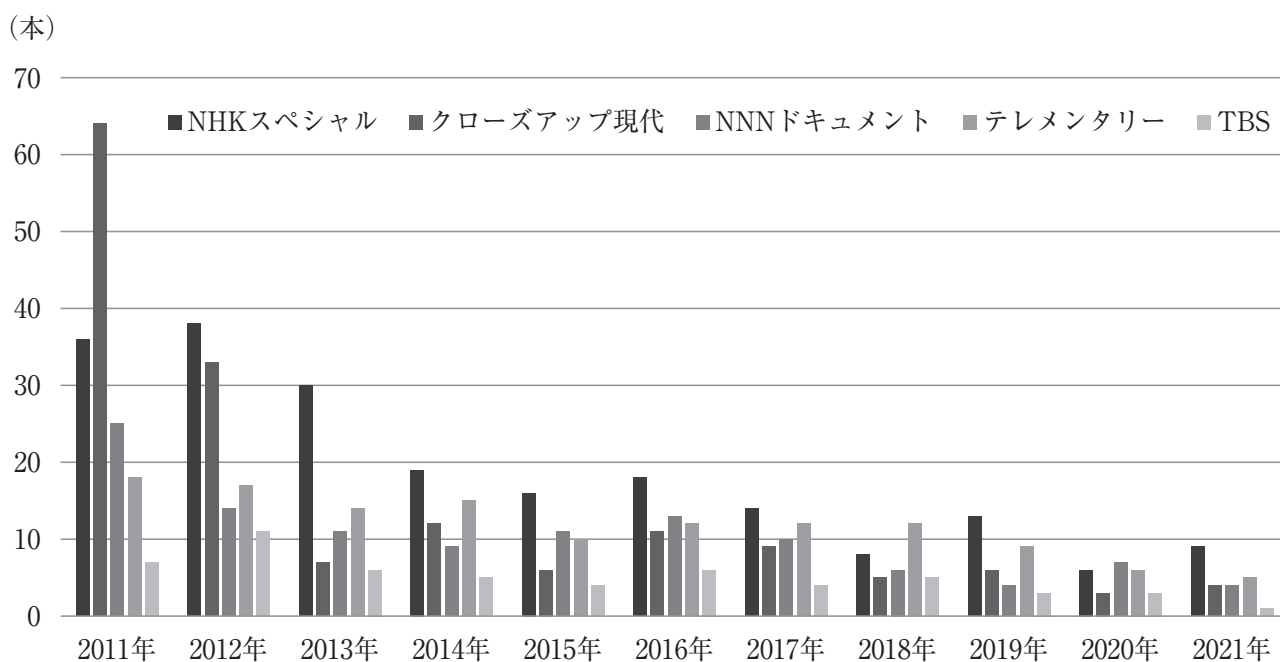
今回の分析では、NHK・民放の主要ドキュメンタリー番組として5番組を対象とした。『NHKスペシャル』『クローズアップ現代』（2016年4月から『クローズアップ現代+』）（以上、NHK）、『NNNドキュメント』（日本テレビ系列）、『テレメンタリー』（テレビ朝日系列）、『報道の魂』『ドキュメンタリー・ザ・フォーカス』（2017年4月から『ドキュメンタリー・ザ・フォーカス』）（以上、TBS系列）である。これら5番組を選定したのは、2011年の東日本大震災の発生から現在に至るまで、内容のリニューアルや放送時間の変更はあっても番組枠が継続して存在し、この10年、継続的に震災関連の番組が放送されていることが確認されたからである。また、これらの番組は各番組の公式WEBサイトに放送記録が残されている。これら番組公式WEBサイトに記載されている内容をもとに震災関連番組かどうかの判定を行い、本数を計上した。

なお今回の対象には、2011年3月以降に放送された「阪神淡路大震災」「熊本地震」「北海道胆振

東部地震」「南海トラフ巨大地震」などに関連した番組も含まれている。これらの災害を取り上げた番組には、「東日本大震災」との関連が濃いものもあれば薄いものも存在する。しかしながら、内容の関連性についての判断には主観が入り込む余地が大きいため、「阪神淡路大震災」「熊本地震」「北海道胆振東部地震」「南海トラフ巨大地震」などの関連災害を扱った番組をすべて含めることとした。同様に、東京電力福島第1原発の事故に関連して、エネルギー政策全般を扱った番組が存在する。これらの番組についても、福島第1原発の事故との関係が濃い・薄いにかかわらず、分析対象に含めることにした。

図3-1は、5番組について東日本大震災発生から10年間の本数の変化を示したものである⁽⁵⁾。5番組の10年間の放送本数は、『NHKスペシャル』207本、『クローズアップ現代+』160本、『NNNドキュメント』114本、『テレメンタリー』130本、『報道の魂』『ドキュメンタリー・ザ・フォーカス』55本であった。5番組すべてで2011年と2012年の本数が多くなっている。これは、震災直後から2012年3月の「震災1年」の節目にかけて大量の番組が放送されたことを示している。その後は概ね、すこしずつ放送本数が減っていく傾向が確認された。2016年は5番組ともわずかに前年の本数を上回っている。これは、2016年3月が「震災5年」の節目だったことから各番組の本数が増加したことによる。また、2016年4月に最大震度7の熊本地震が発生し、東日本大震災と関連した放送が増えたことも影響している。以上のように、5番組とも、10年間を通じた変化の傾向はおおむね共通していることが確認された。

図3-1 主要な震災関連ドキュメンタリー番組の本数（年別）



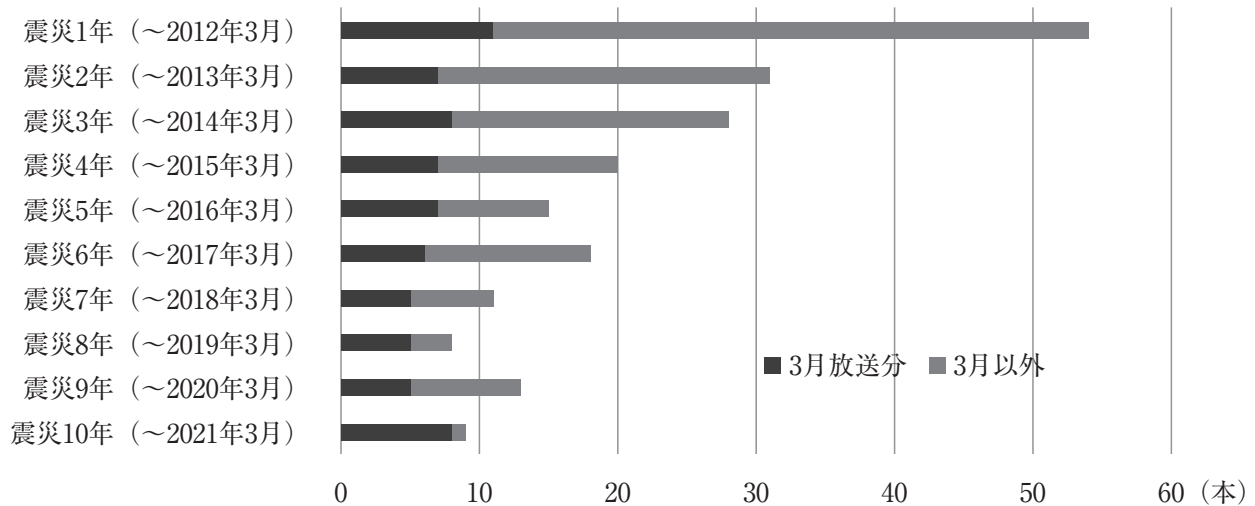
(2) 『NHKスペシャル』の10年

①本数

次に、5番組の中から『NHKスペシャル』について詳しい分析を行う。図3-2は、東日本大震災発生以降の『NHKスペシャル』の本数を年度別に示したものである。暦年ではなく年度で集計し

たのは、NHKの番組改編がおもに4月の年度替わりの時期に行われ、また、震災関連番組の多くが毎年3月11日付近に放送され、その傾向が3月いっぱい続くことから、年度で区切ることで震災1年、震災2年…といった節目ごとの傾向に着目することが可能となるためである。従って、図の一番上の棒グラフ「震災1年（～2012年3月）」は、2011年3月11日から2012年3月31日までに放送された本数を、また次の「震災2年（～2013年3月）」は、2012年4月1日から2013年3月31日までに放送された本数を示している（以下、同様）。

図3-2 『NHKスペシャル』の本数の推移（年度別）



『NHKスペシャル』の放送が突出して多いのは、東日本大震災発生から「震災1年（～2012年3月）」にかけてであり、全207本のうち54本を占めている。その後は、「震災2年」にかけて急激に減少し、「震災10年」に至るまで、概ねゆるやかな減少が続いている。特異な傾向として「震災6年」と「震災9年」に前年を上回る本数が確認された。「震災6年」には、2016年4月に発生した熊本地震に関連する放送が含まれていて、これが本数増加につながっている。また、「震災9年」には、2019年12月に集中編成された「シリーズ首都直下地震」（全7本）の放送が含まれる。

また、各年度に放送された番組のうち、3月に放送された本数（濃）と、3月以外に放送された本数（淡）の割合をみると、「3月放送分」の割合は、年を追うごとに上昇傾向にあることが分かる。「震災1年（～2012年3月）」には全54本の放送のうち、約20%（11本）だったのが、「震災5年（～2016年3月）」には、全15本の放送のうち、約47%を占めた。「震災8年（～2019年3月）」以降は全体の半分を超える割合に達している。震災報道が3月に集中する「3月ジャーナリズム」化の傾向は、震災関連ドキュメンタリーの『NHKスペシャル』においても顕著に見られた。

②テーマの概況

次に、震災関連の『NHKスペシャル』の内容について、8つのテーマに分類して分析を行った⁽⁶⁾。分類では、まず「津波系」「原発系」「次に来る災害」という大分類を設定、さらに「津波系」については「津波自体」「犠牲者」「町の復興」の3つの小分類、「原発系」についても「事故そのもの・廃炉等」「避難・避難生活」「帰還・復興」の3つの小分類に分けて集計した。その結果、大分類で

は「津波系」41%、「原発系」34%、「次に来る災害」18%、その他7%となった（表3-1）。6つの小分類では、「原発系（事故そのもの・廃炉等）」が最も割合が高く（22%）、以下、「津波系（復興）」19%、「津波系（津波自体）」13%、「津波系（犠牲者）」9%といった順となっている。

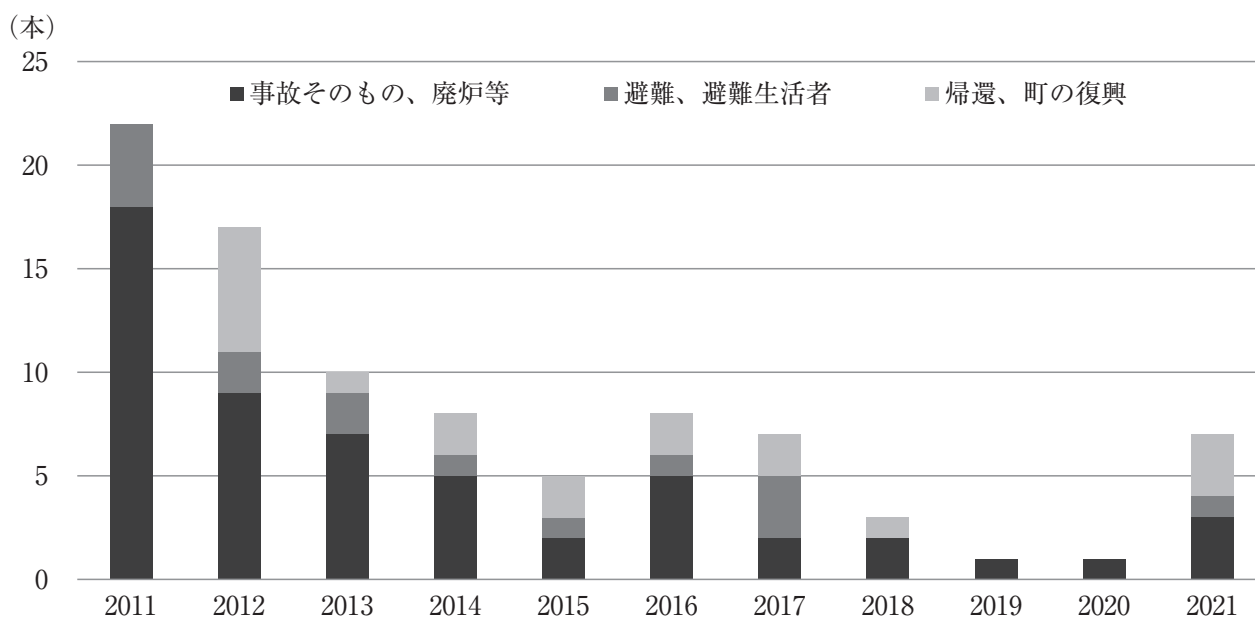
表3-1 震災関連の『NHKスペシャル』のテーマ分類

テーマ分類（大）	テーマ分類（小）	割合（%）
津波系	津波（津波自体、津波被害）	13
	津波の犠牲者、遺族、家族、知人	9
	津波被害からの町の復興	18
原発系	原発事故（事故そのもの、廃炉等）	21
	原発事故による避難、避難生活者	5
	原発事故後の帰還、町の復興	7
次に来る震災（首都直下、南海トラフ等）		17
その他		7

③「原発系」のテーマ

図3-3には、「原発系」の3テーマについて年度別の本数の推移をまとめた。「事故そのもの・廃炉等」をテーマにしたものは、本数の増減はあるものの、10年間途絶えることなく放送が継続している。2016年には、前後の年度に比べて本数の増加が確認されるが、これは「震災5年」という節目にあたり、放送本数が増えたことがその理由である。また、2019年と2020年に1本ずつ放送されているのは、2019年3月に放送された「廃炉への道」と2020年3月に放送された「メルトダウン」の2つのシリーズである。

図3-3 「原発系」の『NHKスペシャル』の本数推移（小テーマ別）



「メルトダウン」（初回2011年12月18日）と「廃炉への道」（初回2014年4月20日）は、『NHKスペシャル』が長期にわたって放送しているシリーズ企画である。2021年3月の「震災10年」の節目までに、『メルトダウン』が9本、『廃炉への道』が8本、放送されている。このうち、「震災9年」の3月に放送された『NHKスペシャル メルトダウンZERO 原発事故は防げなかったのか～見過ごされた“分岐点”～』（2020年3月15日）では、原発事故のあった2011年よりも前に安全性への備えを強化することができなかったのか、電力会社や国の関係者100人ほどの証言をもとに検証した。「震災10年」の3月に放送された『NHKスペシャル 廃炉への道2021 原発事故10年の軌跡』（2021年3月14日）では、5回にわたって「後ろ倒し」されてきた廃炉へのロードマップについて検証している。



画像3-1
『NHKスペシャル メルトダウンZERO
原発事故は防げなかったのか～見過ごされた“分岐点”～』
(2020年3月15日)



画像3-2
『NHKスペシャル 廃炉への道2021
原発事故10年の軌跡廃炉への道』
(2021年3月14日)



画像3-3
『NHKスペシャル
“帰村” 村長 奮闘す～福島・川内村の8か月～』
(2012年11月23日)

一方で、「避難・避難生活」と「帰還・復興」をテーマにした『NHKスペシャル』は、年によって本数のバラつきが見られ、2019年と2020年には放送が途絶えていた。

その理由は、「避難・避難生活」「帰還・復興」を扱った『NHKスペシャル』の多くが、避難指示の「解除」を取材のきっかけにしていることに起因している。原発事故の直後、福島県内では8万人以上の住民に対して避難指示が出され、県内外での避難生活を強いられていた。こうした状況から、いち早く「帰村宣言」を打ち出したのが川内村で、帰村への取り組みを追ったのが「“帰村” 村長 奮闘す ～福島・川内村の8か月～」（2012年11月23日）である。番組では、2012年4月か

ら8か月にわたって取材し、川内村の遠藤雄幸村長が放射線の不安を口にする住民に帰還への理解を求める様子が描かれている。

その後も、「避難・避難生活」「帰還・復興」をテーマにした番組は、「避難指示」解除をタイミングにしたものが数多く見られる。2017年春（3月・4月）には、4町村（浪江町・川俣町・飯館村・富岡町）で避難指示が一斉に解除され、『NHKスペシャル』ではその動向について2回取り上げている。一斉解除の直前、「震災6年」の3月11日には、『NHKスペシャル 避難指示“一斉解除” 東日本大震災～福島でいま何が～』（2017年3月11日）が放送された。この番組では、かつてない規模の避難指示解除を前に、住民の意識が分断されている状況を取り上げた。番組内で紹介されているNHKの住民アンケートによると、当時の飯館村では帰還について、「戻りたい」33.5%、「戻らない」30.8%、「判断がつかない」19.7%、無回答16%であった。

また、一斉解除からおおよそ4か月後には、『NHKスペシャル 東日本大震災 帰還した町で～原発事故7年目の闘い～』（2017年8月9日）が放送された。この番組では、帰還した住民が、人を恐れなくなったイノシシやアライグマなどの野生動物と格闘する様子など、帰還後の生活再建の難しさが描かれている。



画像3-4
『NHKスペシャル
避難指示“一斉解除” 東日本大震災 ～福島でいま何が～』
(2017年3月11日)



画像3-5
『NHKスペシャル 帰還した町で～原発事故7年目の闘い～』
(2017年8月9日)

しかしながら、その後は、住民の帰還について取り上げた番組は放送されていない。「原発系」の『NHKスペシャル』としては、2021年3月の「震災10年」の節目に浪江町出身のディレクターによる対話ドキュメンタリー「私と故郷と原発事故」（2021年3月9日）と「徹底検証“除染マネー”」（2021年3月10日）が放送され、その後は「被曝の森2021 変わりゆく大地」（2021年5月9日）が放送されている。

以上のように、避難指示解除が途絶えていることに起因して、「避難・避難生活」「帰還・復興」をテーマにした番組の減少傾向が見られたが、福島県の現状は、解決にはほど遠い。現在も「帰宅困難区域」とされている自治体は7市町村（南相馬市・飯館村・葛尾村・浪江町・双葉町・大熊町・富岡町）におよび、避難指示は約2万人の住民に出されている。政府は2020年代に「全域で解除をめざす」という方針を打ち出しているが、見通しは立っていないのが現状である。

④「次に来る災害」関連

10年間の本数の推移という点で顕著な傾向が見られたテーマが、「次に来る災害」である。前述の通り、今回の分析では「阪神淡路大震災」「熊本地震」「北海道胆振東部地震」「首都直下地震」「南海トラフ巨大地震」といった、東日本大震災以外の災害を取り上げた番組も対象に含めている。これによって、東日本大震災と関連して「次に来る災害」というテーマが、この10年の間に『NHKスペシャル』において、どのように扱われてきたかを浮き彫りにすることができた。

図3-4 「次に来る震災」を扱った『NHKスペシャルの本数』

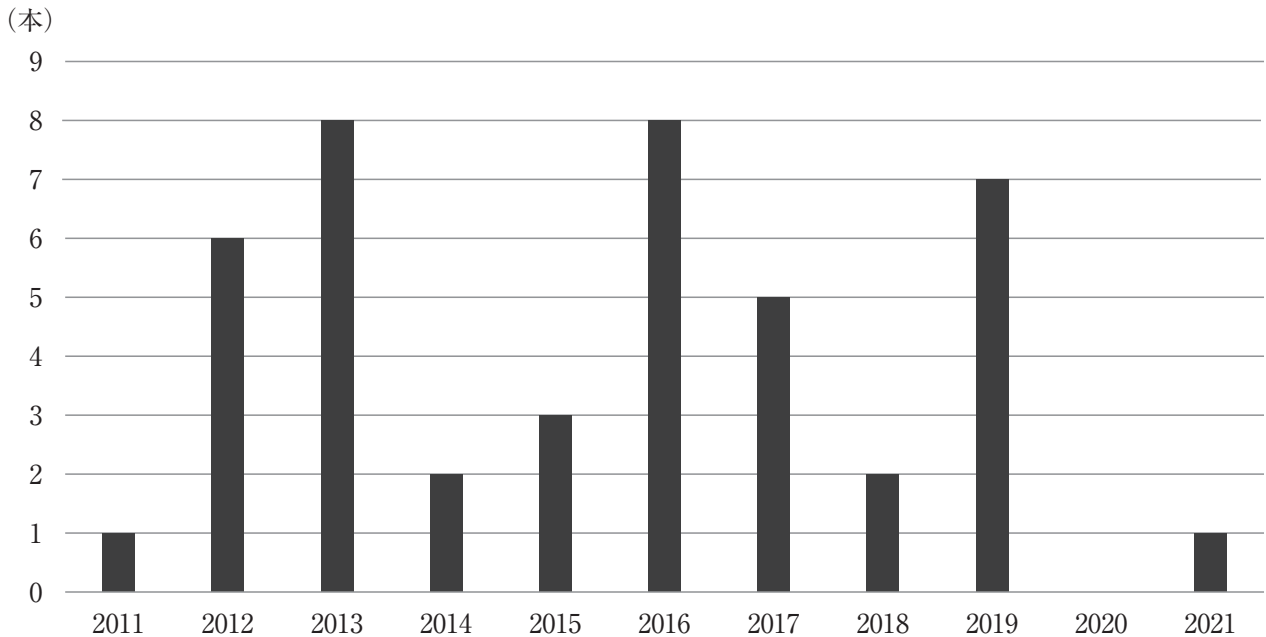


図3-4は、「次に来る災害」を扱った番組の本数の推移をまとめたものである。他の震災関連の『NHKスペシャル』とは異なる傾向が見られた。

2011年に1本放送されているが、これは、2011年9月1日（防災の日）に放送された『巨大津波が都市を襲う～東海・東南海・南海地震～』である。この番組では、東日本大震災をきっかけに東海・東南海・南海地震が同時に起こる三連動地震の被害想定や対策の見直しについて、最新の研究と各地の取り組みについて取り上げている。また、2012年1月17日には、『阪神・淡路大震災17年 東北復興を支えたい～“後悔”を胸に～』が放送され、阪神大震災の復興に関わった人たちが東日本大震災の支援にどう関わったのかを検証したものである。

「次に来る災害」をテーマにした番組は次第に本数が増えていく。2012年4月1日、つまり震災1年を過ぎて、年度が変わったところで放送されたのが『MEGAQUAKE II・巨大地震』第1回である。東日本大震災の前にも放送されていたシリーズの続編にあたるが、東日本大震災を踏まえた地震・津波の「予測研究」の最前線取材したものである。

「次に来る災害」のテーマについて、特徴的な傾向は放送時期である。このテーマの番組が3月に放送されたケースは確認されなかった⁽⁷⁾。また、2016年に「次に来る災害」の本数が大きく増えているが、これはこの年の4月に熊本地震が起きたことが理由である。「震災5年」の節目の直後に発生

した熊本地震を取り上げた『NHKスペシャル』は、この年だけで6本に上った。2016年度は、「廃炉への道」2本をのぞくと、東日本大震災に直接関連した『NHKスペシャル』は翌年1月まで放送されていない。2019年には「次に来る災害」をテーマにした『NHKスペシャル』が7本放送されているが、これはすべて「シリーズ 体感 首都直下地震」というドラマ仕立ての大型シリーズである。

⑤小括

最後に本節での分析結果を二つの点から小括する。

第一は、「3月ジャーナリズム化」と、テーマの「定番化」である。『NHKスペシャル』の本数の推移を分析したところ、「震災1年」の節目を経て少しずつ減少するとともに、3月に放送時期が集中する「3月ジャーナリズム」化の傾向が見られた。「震災1年」を過ぎてから『NHKスペシャル』全体の本数は年々減少していくが、「3月放送分」に限ると、震災2年から震災5年までの本数は7～8本と大きな変化はなかった。その後も、「3月放送分」は、少ない年でも5本（震災7年・8年・9年）であった。最も本数が少なかった震災7年・8年・9年の各年には、共通して放送されているテーマが確認された。以下にその傾向を列記する。

- a. 巨大津波のメカニズムや新たな知見
 - 『“河川津波”震災7年 知られざる脅威』(2018年3月4日)
 - 『“黒い津波”知られざる実像』(2019年3月3日)
 - 『40m 巨大津波の謎に迫る』(2020年3月7日)
- b. 被災地の復興を俯瞰した検証
 - 『めざした“復興”はいま…震災7年 被災地からの問いかけ』(2018年3月11日)
 - 『終の住みかと言うけれど… 取り残される被災者』(2019年3月10日)
 - 『“復興ハイウェー”変貌する被災地』(2020年3月11日)
- c. (津波被害とは独立した) 原発事故の検証
 - 『被曝の森2018 見えてきた“汚染循環”』(2018年3月7日)
 - 『メルトダウンFile.7』(2018年3月17日)
 - 『廃炉への道2019』(2019年3月16日)
 - 『メルトダウンZERO』(2020年3月15日)

『NHKスペシャル』に関するかぎり、毎年3月に放送される番組には、上記a～cの3テーマが必ず含まれている。いずれも東日本大震災を検証する上で欠かせないテーマであり長期にわたる検証が求められるが、一方で硬直化を感じさせる傾向でもある。テーマの「定番化」が進み、それが「3月ジャーナリズム」のマンネリ化につながっているのではなからうか。⁽⁸⁾

第二は、「3月ジャーナリズム」化にともなう3月の「聖域」化である。本節の分析で対象にしているのは、あくまで「東日本大震災」に関連するドキュメンタリー番組である。しかし上述のように、今回の分析では、東日本大震災以外の災害を取り上げた番組を関連性の程度にかかわらず対象に含めている。そのことにより、東日本大震災以外の災害、つまり「次に来る災害」というテーマの扱われ方の傾向も明らかになった。

それは、「次に来る災害」に関するかぎり、3月に放送されているケースはない、という点である。「次に来る災害」は『NHKスペシャル』全体の18%を占めているが、このテーマのみ、3月以外の時期に放送されていること、つまり、3月には放送されていないことには、放送局サイド、制作者サイドの無意識の「意思」が感じられる。すなわち、「3月はあの震災に思いをはせるべき」と

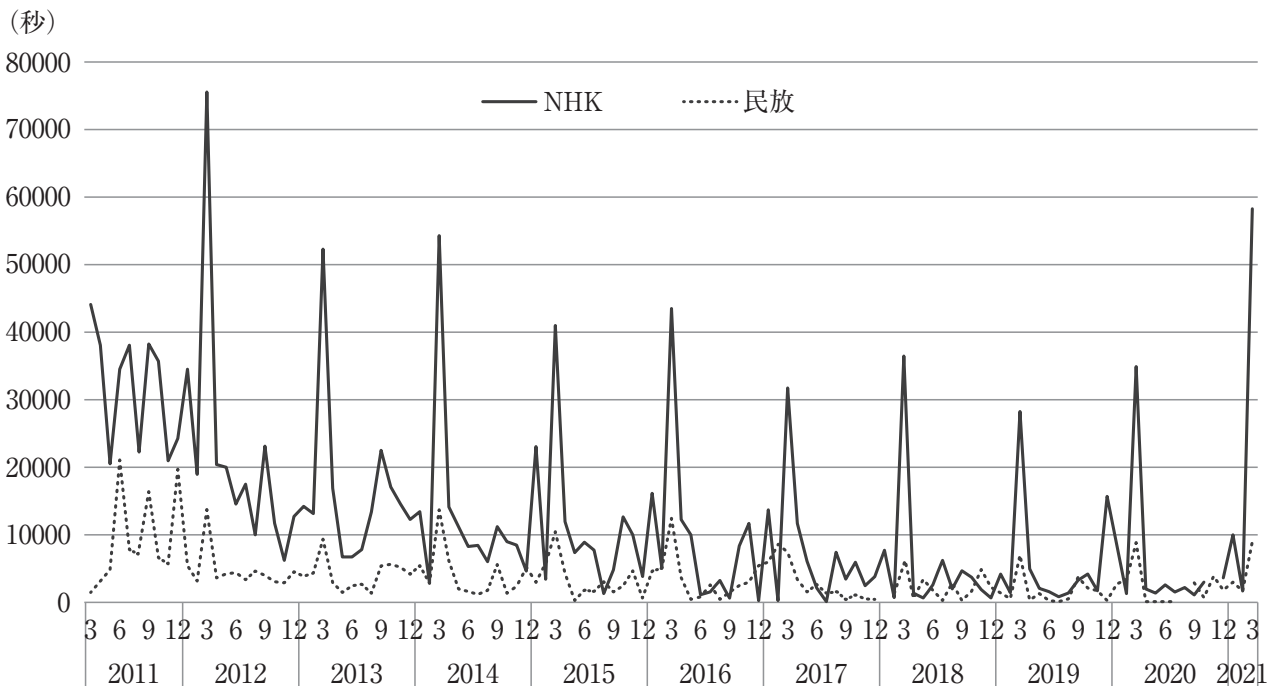
いった、3月を特別な「聖域」とする意識ではなかろうか。

4. 震災関連ドキュメンタリーは「震災10年」をどう伝えたか

(1) 概況

2021年3月、NHK・民放各局は「震災10年」をテーマに、ニュース・情報番組を中心として大規模な報道を展開した。ドキュメンタリー番組も例外ではなかった。図4-1は、過去10年間における震災関連ドキュメンタリーの「放送時間量（秒）」の月別推移を示したものである⁽⁹⁾。これをみると、震災関連ドキュメンタリーの放送時間量は、①2011年から2012年3月までのピークから時間の経過とともに少しずつ減少してきていること、②各年3月には一時的に放送が増加する「3月ジャーナリズム」化の傾向があること、③この①②の傾向はNHK、民放に共通してみられること、が分かる。そうしたなかで2021年3月は、2017年以降では最も放送時間量が長く、特にNHKは2012年3月に次ぐ放送量を記録した。「震災10年」が大きな節目として各局で意識されていたことが見て取れる。

図4-1 ドキュメンタリー（放送時間量）の推移



(2) 対象と方法

今回の分析では、2021年3月に放送された震災関連ドキュメンタリーの中から22本（NHK14本、民放8本）を対象とした。22本はいずれもNHK・民放の代表的な定時のドキュメンタリー番組枠で放送されたものである（文末資料）。この他にも特番や単発の番組も多く放送されたが、今回の分析では過去とのデータ上の比較やメタデータの特性上の事情等も加味して除外した⁽¹⁰⁾。

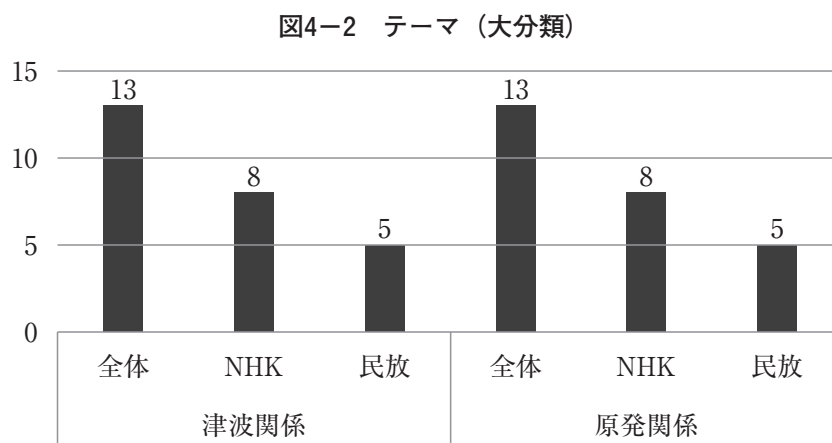
分析ではこれら22本の番組について、「Aテーマ」「B地名」「C登場人物」についてのデータを取

集した。「Aテーマ」については、「大分類」（＝「津波」関係か「原発事故」関係か）、「小分類」（＝a 津波そのもの、b 津波の犠牲者・遺族・家族・友人、c 津波被害からの町の再建、復興、d 原発事故、e 原発事故による避難生活者、f 原発事故後の町への帰還・復興、g その他）についてそれぞれデータを取った。また、「B地名」については、a番組の主要舞台となっている場所、c画面にテロップで表示される地名（県名、市町村名）のデータを収集した。そして「C登場人物」については、番組中のインタビューで発話者として登場している人物についての具体的データ（氏名、性、年齢、職業、属性、立場など）を収集した。また、幾つかの番組については、ナレーションの原稿をすべて書き起こして必要に応じて資料として用いた。以下、これらのデータを用いて行った分析の結果を、①テーマ、②地名、③登場人物の順に記述する。

(3) 結果

①テーマ

図4-2は、22本の番組のテーマについて「大分類」（＝「津波」関係か「原発事故」関係か）を示したものである。震災関連ドキュメンタリーの中には、この「大分類」の中に入らないものもあり得るが、今回の22本についてはいずれかに分類された。内訳をみると、「津波」関係＝13、「原発事故」関係＝13と同数であった。またNHK、民放別でも、「津波」関係、「原発事故」関係がともにNHK＝8、民放＝5と同じ本数であった。このように今回対象とした22本の震災関連ドキュメンタリーが扱ったテーマは、大きな傾向としてはNHK、民放ともに特段の偏りがなかったことが分かる。



一方、テーマの「小分類」をみると（表4-1）、目立つのが「b. 津波の犠牲者・遺族・家族・友人」と「e. 原発事故による避難生活者」の2カテゴリーの数が多いことである。「b. 津波の犠牲者・遺族・家族・友人」は、NHK＝6、民放＝4、「e. 原発事故による避難生活者」は、NHK＝7、民放＝5である。この結果は、震災関連ドキュメンタリーにおいて、津波関係のテーマについても原発事故関係のテーマについても、ともに「人間要素」が主要なテーマとなっていることを示している。2節でも触れたように、先行研究においても遠藤薫（2012）や日高勝之（2021）が、震災関連ドキュメンタリーにおいて「人間要素」が大きな割合を占める傾向が強いこと（＝人間化）

を指摘していたが、「震災10年」の節目に放送された番組においても同様の傾向が存在していたと言える。

他方で、NHKと民放とのあいだに差異が見られたのが「a. 津波そのもの」と「f. 原発事故後の町への帰還・復興」の2カテゴリーである。「a. 津波そのもの」はNHK=2、民放=0、「f. 原発事故後の町への帰還・復興」はNHK=4、民放=1と、両カテゴリーともに民放に比べてNHKの本数が多くなっている。このうち「a. 津波そのもの」については、津波のメカニズム自体や津波によって引き起こされた被害を科学的に解明するような番組をNHKが放送していたことを反映している。また、「f. 原発事故後の町への帰還・復興」については、NHKが避難解除後の住民の帰還や町の復興に関わる政策的な課題などを正面から扱う何本かの番組を放送していたことを反映している。

表4-1 番組のテーマ（小分類）

	NHK	民放	合計
a. 津波そのもの	2	0	2
b. 津波の犠牲者・遺族・家族・友人	6	4	10
c. 津波被害からの町の再建、復興	2	2	4
d. 原発事故	3	3	6
e. 原発事故による避難生活者	7	5	12
f. 原発事故後の町への帰還・復興	4	1	5

②地名

次に番組に登場した「地名」について見てみる。図4-3は、22本の番組で主要な舞台になった「県名」を抽出した結果である（主要舞台が複数に渡る場合は、複数カウント。登場した県名の合計数は146）。これをみると、福島県が最も多く43%と全体の4割以上を占めており、以下、宮城27%、岩手16%、その他14%となっている。一般的に「被災三県」と呼ばれる福島、宮城、岩手の各県のあいだでも、番組に取り上げられる回数において大きな開きがあることが分かる。なお、「その他」の中には、東京都や埼玉県などが含まれている。また、この三県の分布は、NHKと民放のあいだでも大きな傾向の違いはなかった。⁽¹¹⁾

図4-3 番組の舞台になった場所（県）

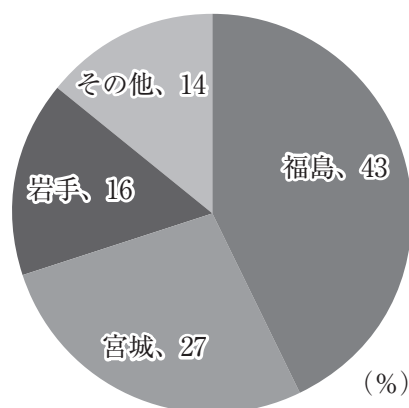
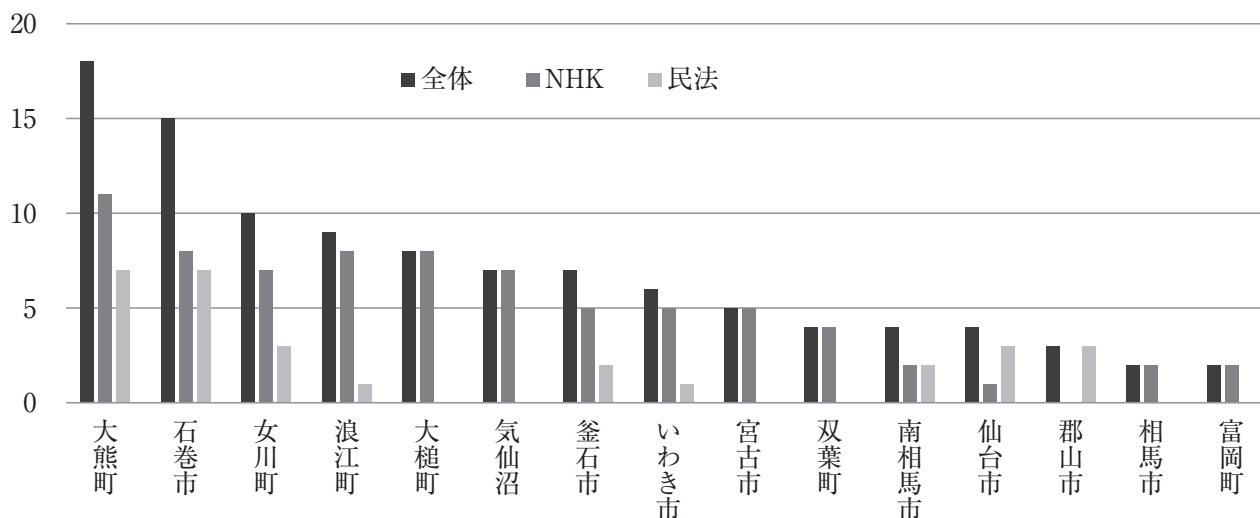


図4-4 番組に登場した市町村 (NHK、民放別)



次に、番組に登場した「市町村」について見てみると、幾つの特徴をみて取ることができる。図4-4は番組に登場した「市町村」を数の多い順から15位までを、NHK、民放別で示したものである。最も数が多いのが大熊町で、以下、石巻市、女川町、浪江町、大槌町などの順になっている。

特徴の第一は、上位にランクしているのが、原発事故で放射能汚染の被害を受けて避難指示区域となった市町村（大熊町、浪江町、双葉町、南相馬市、相馬市、富岡町など）か、津波で大きな被害を受けた市町村（石巻市、気仙沼市、釜石市、宮古市、南相馬市など）のいずれかであることである。

第二の特徴は、ランキングの上位と下位とで大きな開きがあることである。1位の大熊町がNHK、民放あわせて18回、2位の石巻が同15回登場しているのに対して、14位の相馬市、15位の富岡町はともに2回である。テレビや新聞の震災関連報道の量については、被害（物的・人的被害）の程度に報道量が比例する傾向があることや、被害が大きくても報道量が少ないエリアが出現し、結果的に二次災害が生じたり支援物資の不足が発生したりするなど、「情報の地域偏在」の問題がかねてから指摘されてきた（松山秀明2013、稲増一憲・柴内康文2015、米倉律2017など）。先行研究での指摘はいずれも新聞の記事数やテレビ報道全体の件数についてのものであるが、今回の分析によってドキュメンタリーにおいても同様の傾向があることが示唆された。ただし、今回の分析は対象本数が22本と限られているため、より多くの番組を対象として改めて詳細に分析される必要がある。

特徴の第三は、同じ市町村でもNHKと民放のあいだで登場回数に大きな差異が存在している場所がある点である。例えば、浪江町はNHKの8回に対して民放は1回、大槌町はNHKの8回に対して民放は0回、気仙沼市はNHKの7回に対して民放0回などとなっている。取材地は、番組のテーマ・内容によって異なるから、市町村の登場回数が異なるのは当然であるが、この点も上記の「情報の地域偏在」の問題との関係で、より多くの番組を対象として検証される必要がある。

そして第四の特徴として挙げられるのが、同じ福島第一原発が立地する地元自治体でありながら、大熊町と双葉町とのあいだで登場回数に大きな格差が生じている点である（大熊町=18回、双葉町=4回）。二つの町は、ともに原発事故後、全町避難を強いられた。大熊町ではその後、町内の

一部で避難指示が解除されインフラが復旧するなどして、少数ながら住民の帰還が始まっている。これに対して双葉町は、町内のほぼ全域が帰還困難地域に指定され、すべての住民が今なお避難生活を続けており、役場機能も福島県いわき市などに移転したままとなっている。限定的とはいえ目に見える形で復興が進んでいる町と、そうでない町とのあいだで、番組で取り上げられる回数に大きな差が生じていることになる。こうした差が、今回の分析対象となった22本だけでなくドキュメンタリー全体、さらには報道全体にも見られるのかについても、更なる検証が必要である。

さらに第五に、NHKと民放では、番組1本あたりに登場する市町村の数が異なっている点も特徴的であった。NHKの番組（14本）に登場した市町村数は平均6.25であったのに対して、民放の番組（8本）に登場した市町村数は平均5.25であった。NHKの番組のなかでも登場した市町村数が最も多かった番組は、『NHKスペシャル 定点映像10年の記録～100か所のカメラが映した“復興”』（NHK、3月11日）である。この番組は、被災三県の各地に定点的にカメラを据え、震災からの10年間の状況や景観の変化、その中での人々の暮らしの変化などを辿ったものである。この番組には17の市町村が登場している。一方、登場した市町村数が最も少なかった番組は、『テレメンタリー 3.11を忘れないSPゼロから街をつくる、ということ～陸前高田10年の全軌跡』（テレビ朝日系列、3月14日）であった。陸前高田市の復興のプロセスを丹念に追ったこの番組に登場した市町村数は2で、陸前高田市のほかは一部分で東京都（台東区）が登場したのみであった。



画像4-1

『NHKスペシャル 定点映像
10年の記録～100か所のカメラが映した“復興”』
(NHK、3月11日)



画像4-2

『テレメンタリー 3.11を忘れないSP
ゼロから街をつくる、ということ～陸前高田10年の全軌跡』
(テレビ朝日系列、3月14日)

③登場人物

対象22本の番組で、インタビューに登場した人物は計268人（NHK194人、民放74人）、性別では男性181人、女性87人であった。登場人物について注目されるのは、NHKと民放で番組あたりの登場人物数に差異がある点である。NHKの番組（14本）の登場人物は平均13.9人だったのに対して、民放の番組では同9.3人であった。登場人物数が最も多かった番組は、『明日へつなげよう“助かった命”を守るために～震災関連死 10年の教訓～』（NHK、3月7日）で27人の人物が登場していた。一方、最も少なかった番組は、『テレメンタリー 3.11を忘れない 震災家族～遺された父と子の10年～』（テレビ朝日系列、3月7日）の3人であった。

表4-2 登場人物の属性

属性	NHK	民放
一般市民	57	74
地方自治体関係者	12	3
企業・NPO	7	0
東電関係者	2	4
政府関係者	6	3
専門家	11	1
その他	5	15

(%)

また登場人物に関しては、その属性構成においてもNHKの番組と民放の番組とのあいだに傾向の違いがあった。表4-2は、番組の登場人物の属性の構成比についてNHKと民放別に示したものである。これを見ると、NHKも民放もともに「一般市民」の割合が最も高い（NHK=57%、民放=74%）。他方でNHKでは、「地方自治体関係者」「企業・NPO」「専門家」など、様々な属性の人物が登場しているのに対し、民放では「一般市民」以外の属性の人物の割合がいずれもひと桁台と低くなっている。22番組のなかでも登場人物の属性数が最も多かった番組は、『NHKスペシャル

廃炉への道 原発事故10年の軌跡』（NHK、3月14日）であった。最長40年を要するとされる福島第一原発の廃炉に向けた困難なプロセスを追ったこの番組には、「一般市民」以外に、双葉町長（＝「地方自治体関係者」）、東電CDD（＝「東電関係者」）、早稲田大学教授（＝「専門家」）など計6つの属性の人物が登場していた。一方、登場人物の属性数が最も少なかったのは、『NNNドキュメント きよさんと、ふたつの故郷 山と海と原発と…』（日本テレビ系列、3月7日）、『ザ・ノンフィクション わすれない 僕らが歩んだ震災の10年』（前編・後編）（フジテレビ系列、3月7日・14日）の3本で、いずれも登場人物は「一般市民」の1属性のみであった。

番組の登場人物数や属性数におけるこうした差異は、先に見た登場する市町村の数と同様、その番組の性格の違いを示している。登場人物数や属性数が多い番組は、扱うテーマをより広い視点から多角的に掘り下げようとする調査報道型の番組である。このタイプの番組では取材地も広範にわたるため登場する市町村数も多くなる。他方、登場人物の数が少なく属性も「一般市民」だけであるような番組は、特定の被災者に密着し、その日々の生活を描き、彼らの思いを伝えるものが多い。このタイプの番組では、取材場所も特定の場所に限定されるため登場する市町村数も極めて少ない。こうした番組のタイプの違いは、全国放送組織で、取材・制作も全国規模の体制で行うNHKと、各都道府県のローカル局が個別に取材・制作を行うことが多い民放との違いとも関係があると考えられる。

④「寄り添う報道」

震災報道においては「寄り添う報道」がある種のキーワードとなった。「寄り添う報道」については様々な論者による多様な議論がある一方で、ジャーナリズム研究のなかでも定義が定まっているわけではない。一般的には「被災地・被災者の立場や事情に配慮して、可能な限り被災地・被災者の側に立ち、その声に耳を傾けたり、代弁したりするような取材・報道姿勢」を示す言葉である（米倉律、2016）。被災地での取材を長く続けてきたジャーナリストの寺島英弥は「寄り添う報道」のあり方について次のように書いている。

そこにいつもとどまり、同じ時を過ごし、悩み苦しみをそばで聴き、理不尽には問いを重ね、取り戻すべきもの、解決すべきことを外へ伝え、孤立する人と手助けする人をつなぎ、誰

かが見つけた希望の種と心の癒し、明日を探す道筋を分かち合う場をつくる。そして、日々の小さな事実の続報を積み重ね、歴史として記録していく。被災地に生きる者のジャーナリズムの形だ（寺島英弥、2021：29）。

今回の対象番組の中にも、広い意味で「寄り添う報道」としての性格を持った番組は少なくなかった。特に民放のローカル局が制作した番組の多くが、被災地・被災者に「寄り添う」スタイルの番組だったと言える。しかし、ひと口に「寄り添う報道」と言っても、そのアプローチは多様であり得る。今回は「寄り添う報道」としては対照的なアプローチを採っていると言える2本の番組に注目し、それぞれの特徴の分析を試みた。

2本の番組とは、『NNNドキュメント 3.11大震災シリーズ (96) きっと、大丈夫。福島で生まれた“きぼう”』（日本テレビ系列、3月21日）（以下、『きっと、大丈夫。』と略記）と『テレメンタリー “3.11”を忘れない83 変わる古里—フクシマはいま—』（テレビ朝日系列、3月20日）（以下、『変わる古里』と略記）である。前者（＝『きっと、大丈夫。』）は、福島県内のNNN系列局である福島中央テレビが制作した番組で、様々な悩みや葛藤を抱えながらも福島県内で子供を産み・育ててきた何組かの親たちの10年間の姿を描いた。また、後者（＝『変わる古里』）は、除染で出た大量の廃棄物の保管場になっている大熊町で生きる2人の男性の姿を通して「課題山積の福島の復興」の諸相を伝える番組で、福島県内のANN系列局である福島放送が制作した。



画像4-3

『NNNドキュメント 3.11大震災シリーズ (96) きっと、大丈夫。福島で生まれた“きぼう”』（日本テレビ系列、3月21日）



画像4-4

『テレメンタリー “3.11”を忘れない83 変わる古里—フクシマはいま—』（テレビ朝日系列、3月20日）

この2本の番組は、ともに地元福島のローカル民放局の制作番組であり、また原発事故によって何らかの影響や被害を受けた地元住民に密着し、彼らが置かれた状況や彼らの声を伝える番組である。しかし、そのアプローチは対照的である。『きっと、大丈夫。』は、様々な困難や苦しみを経験しながらも前向きに生きる親子の姿を取り上げる。例えば、番組に登場した鈴木裕海さんは、息子の一也さんが小さい頃には被爆を恐れて外で遊ばせることができなかった。裕海さんは一也さんの内気な性格を変えようと地元の少年野球チームに入れる。その結果一也さんは、何事にも積極的な性格となったという。一也さんはインタビューで「できることもいろいろ増えたし、楽しさも10年

前に比べるとずっと増えた。親には感謝しきれない」と語る。また番組では、福島原発3号機の爆発の直後に南相馬市内の病院で出産した塚本佳帆里さん親子を紹介、危機のなかで出産に立ち会ってくれた医師や看護師への感謝の気持ちを今も持ち続ける佳帆里さんの声や、10年後の今、元気に育っている息子の姿を明るいトーンを基調にして伝える。

一方、『変わる古里』に登場する2人の男性は、震災から10年経った今も前向きに生きることができずにいる。津波で家を流された猪狩松一さんは、除染廃棄物の処分場建設のために自宅のあった土地を手放したことを後悔している。そして「古里を追われたが自分から逃げ出したわけではない。お金なんか要らないから（古里を）元の姿に戻してほしい」と訴える。また津波によって父親、妻、子供を失った木村紀夫さんは、原発事故が起きたために家族の捜索すらできなかった過去を持つ。木村さんは中間貯蔵施設のために自宅の土地を提供することを拒否し、今も東電に対する怒りを抱き続けている。『変わる古里』は、こうした2人の男性の姿と声を淡々と伝える。

2本の番組のアプローチの差異は、ナレーション原稿からも読み取ることができる。今回の分析では、2番組のナレーション原稿を書き起こし、そこで使われている名詞、形容詞、副詞、動詞をポジティブセンスなものとネガティブセンスなものに分類・集計した。その結果、『きっと、大丈夫』には、「豊かな自然」「恵まれた」「生まれて来てくれてありがとう」「喜び」「満面の笑み」などポジティブな言葉が22回、「悩んだ」「不安」「不確か」「正解がない」などネガティブな言葉が14回、使われていた。一方、『変わる古里』では、「穏やかな風景」「優しい表情」などポジティブな言葉が7回、「消えない思い」「手放す」「多くを失った」などネガティブな言葉が20回、使われていた。このようにナレーションで使われている言葉からも、2番組のトーンが対照的であることが分かる。

以上のような2番組のアプローチの違いは、前者＝『きっと大丈夫』は「エンカレッジ型」、後者＝『変わる古里』は「問題発見・共有型」と特徴づけることができる。「エンカレッジ型」は、被災地・被災者を励ましたり癒したりする、また希望や喜びを分かち合ったり、それらを視聴者に伝えようとするアプローチである。一方、「問題発見・共有型」は、被災地・被災者が抱える問題や悩みを彼らとともに訴えたり、問いかけたり、外部へ伝えようとしたりするアプローチである。「寄り添う報道」は多様であり、ここに挙げた以外にも様々なアプローチがあると考えられる。震災関連ドキュメンタリーが「寄り添う報道」としての性格を持つ場合、それがどのような種類のアプローチなのかという点が、その理由や背景と共に、さらに検討されていく必要があると思われる。

5. まとめと考察

本稿では、震災関連ドキュメンタリーが、震災についての何をどう伝えてきたのか、その特徴や傾向、課題等を明らかにするために、①震災関連のテーマを扱った『NHKスペシャル』207本、②震災10周年の節目にあたった2021年3月に放送されたNHK、民放の主要ドキュメンタリー22本を対象に内容分析を行った。以下では、分析から得られた主要な知見をまとめながら、それらについて幾つかの角度から検討・考察する。

第一に、今回の分析では従来からニュース・報道番組において指摘されてきた「3月ジャーナリズム」化の傾向はドキュメンタリー番組においても同様に生じていることが明らかになった。

『NHKスペシャル』では、各年の3月に放送された本数の全体に占める割合が10年のあいだに年々増加していた。またその他のドキュメンタリー番組においても、毎年3月に放送が集中する傾向が見られた。震災から10年という時間が経過するなかで、震災に対する社会的関心や人々の記憶が低下していることが各方面で指摘されている。しかし他方で、事故を起こした原発の処理・廃炉、住民の帰還、生活の再建など、震災からの復興は未だ道半ばである。その意味で震災は今も続いている。そうしたなか、被災地、被災者の現状や声をどう継続的に伝え続けられるか、またそれを通じて震災・復興に関わる問題をどう社会全体で共有できるか、震災関連ドキュメンタリーの社会的役割が改めて問われていると言える。

第二に、『NHKスペシャル』のテーマ分析から、番組で扱われてきたテーマに関する特徴や傾向の諸相が明らかになった。一方において、津波からの町の復興や、原発事故による避難指示解除に伴う住民の帰還など、その時々における目立った動きや話題になった事象の関連テーマが多く扱われる傾向が見られた。他方で、各年3月に放送される番組を中心に「津波のメカニズム」「被災地の復興」「原発事故の検証」など、テーマの「定番化」の傾向が存在することが分かった。また、南海トラフ地震、首都直下型地震など「次に来る地震」をテーマとして扱う番組も多く放送されている。これらの番組は、東日本大震災の教訓を次の震災にどう生かすかという問題意識のなかで、最新の被害想定や対策のあり方などを伝えるものであった。

ドキュメンタリー番組は、時事的なニュースや動きを扱う狭義のニュース・報道とはひとまず区別されるとはいえ、目立った動きや変化が生じていない状況で企画を成立させることは容易ではない。しかし、長期的・継続的な取材や調査に基づいて、一般にはあまり知られていない事実や問題を掘り起こしたり、社会全体に届きにくい弱者の立場や声を代弁したりすることは、ドキュメンタリー番組に期待されている重要な機能である。その意味では、被災地や被災者をめぐる目先の動きや事象に囚われない粘り強い取材力や強い問題意識に基づく企画力が必要とされていると言える。他方で、被災地・被災者の現状や声を伝え続けることだけでなく、震災の教訓を次の災害にどのように生かしていくのかという方向性も引き続き追及されていくべきであろう。

第三に、「震災10年」の節目にあたった2021年3月に放送されたNHKと民放の震災関連ドキュメンタリーの比較分析からは、NHKと民放の番組が扱うテーマには大きな差異がない一方で、テーマの取り上げ方、取材手法などが対照的であることが分かった。すなわち、NHKの番組では、取り上げられる地名や人物、人物の属性数が多く、逆に民放ではそれらの要素の数が少なかった。これは、同種のテーマを扱う場合においても、NHKの番組は広域的に、また多角的にテーマにアプローチし、掘り下げるような種類のものが多いこと、逆に民放の番組では取材対象が特定の地域に限定され、当該地域で暮らす少数の人物に密着しながら描くような番組が多いことを示している。

東京に本部を置き、各地に地域放送局を展開する全国組織であるNHKと、基本的に各地域に根差した地域メディアである民放とでは、地域への関わり方や地域社会との距離感は異なっているし、ドキュメンタリー番組を制作する体制や手法も異なることが多い。そうした差異を前提としつつ、震災関連ドキュメンタリーにおいて問われるべきは、NHK、民放各局がそれぞれの長所や個性を発揮しあいながら、震災や復興をめぐるテーマや内容について、全体として多様性を維持できているか、必要なテーマ・内容が過不足なく扱われているかどうかという点であろう。

もとより、今回の分析は、震災からの10年間に放送された震災関連ドキュメンタリーのすべてを

対象にしたものではない。従って、ここで指摘したような論点や課題についても、さらなる分析を経て、より詳細に検証・考察される必要がある。『NHKスペシャル』以外の主要なドキュメンタリー番組を対象とした10年分の放送内容の分析、NHK・民放各局のあいだの局ごとの比較分析、ドキュメンタリー以外の番組ジャンルとの比較などについては、今後の研究課題としたい。

※本稿の執筆では、古澤が3節を、米倉が1、2、4、5の各節を担当した。

謝辞：

本論文は、放送文化基金の助成（2020年度）を受けた研究「映像アーカイブを用いた震災関連報道10年の時系列分析」の研究成果である。

注：

- (1) 各番組の公式HPから震災をテーマにした番組を抽出してカウントした数。
- (2) これ以外の定時のドキュメンタリー番組枠としては、NHKでは『明日へ』『ドキュメント72時間』『目撃! につぼん』『ETV特集』など、民放でも『報道の魂』『ドキュメンタリー・ザ・フォーカス』（以上、TBS系列）、『FNSドキュメンタリー大賞』『ノンフィクション』（以上、フジテレビ系列）、『ザ・ドキュメンタリー』『ガイアの夜明け』（テレビ東京系列）などがあり、それぞれの枠内で数多くの震災関連ドキュメンタリーが放送されてきた。
- (3) 例えば、NHKは『NHKスペシャル 緊急報告 東北関東大震災』を発生2日後の2011年3月13日に、『NHKスペシャル 東北関東大震災から10日』を3月20日に放送している。民放でも『NNNドキュメント 東日本大地震 発生から10日 被災者は今…』（日本テレビ系列）が3月20日に、『ガイアの夜明け ライフラインを守れ! ~震災支援19日間の総力戦』（テレビ東京系列）が3月29日に、それぞれ放送されている。
- (4) 今回の分析では、定時枠の番組としてNHKは、『NHKスペシャル』『明日へつなげよう』『目撃! につぼん』『クローズアップ現代』、民放は『NNNドキュメント』『テレメンタリー』『ノンフィクション』を対象とした。このうち『クローズアップ現代』は厳密にはドキュメンタリー番組とは言い難いが、内容・テーマを考慮して対象に含めた。
- (5) 対象期間は2011年3月11日より2021年5月までである。
- (6) コーディングとそれに基づく分類作業は、プロジェクトの複数のメンバーによって行った。また、内容的に複数のテーマに分類される場合は、それぞれカウントして分類した（複数カウント）。
- (7) 唯一の例外として『NHKスペシャル THE NEXT MEGAQUAKE THE 巨大地震 “大変動期” 最悪のシナリオに備えろ』が2013年3月28日に放送されているが、テレビ局の編成では、事実上の新年度の扱いである。
- (8) ただし、2020年3月の『“復興ハイウエー” 変貌する被災地』は異色の内容であった。
- (9) JCC社提供の震災映像アーカイブのメタデータを使った分析結果による。同メタデータについての詳細は、谷・水原・米倉・小林「震災テレビ放送・報道10年の全体像」を参照（本誌7~27頁）。
- (10) NHK・Eテレの『ETV特集』も除外している。プロジェクト全体の分析で使用したJCC社の震災映像アーカイブおよびメタデータでEテレが対象に含まれていないためである。
- (11) NHKでは福島43%、宮城25%、岩手18%、民放では福島43%、宮城31%、岩手9%であった。

文献

- 朝日新聞社編「特集 問われるメディアの役割と責任『3・11』から10年」『Journalism』2月号、No369
- 遠藤薫（2012）『メディアは大震災・原発事故をどう語ったか 報道・ネット・ドキュメンタリーを検証する』東京電機大学出版局
- 福田充編著（2012）『大震災とメディア 東日本大震災の教訓』北樹出版
- 原由美子（2015）「震災後3年間 テレビ番組で何が伝えられてきたのか ドキュメンタリー番組で描かれた被災者、被災地」『文研年報2015』Vol.59
- 原由美子（2017）「東日本大震災から5年 テレビ番組は何を伝えてきたか 夜のキャスターニュース番組とドキュメンタリー番組」『文研年報2017』Vol.61
- 原由美子・大高崇（2019）「3.11はいかに語り継がれるか～東日本大震災後7年・テレビ報道の検証」『文研年報2019』Vol.63
- 日高勝之（2021）『「反原発」のメディア・言説史 3・11以後の変容』岩波書店
- 伊藤守（2012）『テレビは原発事故をどう伝えたのか』平凡社
- 稲増一憲・柴内康文（2015）「テキストデータを用いた震災後の情報環境の分析」池田謙一編『震災から見える情報メディアとネットワーク』東洋経済新報社
- 小林直毅編著（2018）『原発震災のテレビアーカイブ』法政大学出版局
- 七沢潔（2021）「福島原発事故10年、テレビは何を伝えたか～ドキュメンタリー番組を中心とした内容分析～」『放送研究と調査』11月号
- NHK放送文化研究所（2011a）「東日本大震災発生時・テレビは何を伝えたか(1)」『放送研究と調査』5月号
- NHK放送文化研究所（2011b）「東日本大震災発生時・テレビは何を伝えたか(2)」『放送研究と調査』6月号
- 日本新聞協会編（2021）「特集 東日本大震災から10年」『新聞研究』4月号、No.833
- 丹羽美之（2013）「東日本大震災を記憶する—震災ドキュメンタリー論」丹羽美之・藤田真文編『メディアが震えた テレビ・ラジオと東日本大震災』東京大学出版会
- 松山秀明「テレビが描いた震災地図—震災報道の『過密』と『過疎』」丹羽美之・藤田真文、前掲書
- 高野明彦・吉見俊哉・三浦伸也（2012）『311情報学 メディアは何をどう伝えたか』岩波書店
- 寺島英弥（2021）『被災地のジャーナリズム 東日本大震災10年『寄り添う』の意味を求めて』明石書店
- 瓜知生（2011）「3月11日、東日本大震災の緊急報道はどのように見られたのか」『放送研究と調査』7月号
- 山田健太（2013）『3・11とメディア 徹底検証 新聞・テレビ・WEBは何をどう伝えたか』トランスビュー
- 山口勝（2021）「震災アーカイブから災害アーカイブへ～防災教育と災害伝承におけるメディアの役割～」『放送研究と調査』8月号
- 米倉律（2016）「地域メディアが伝える震災と復興—東日本大震災の被災地で活動するジャーナリスト達の5年—」『日本オーラル・ヒストリー研究』第12号
- 米倉律（2017）「震災テレビ報道における情報の『地域偏在』とその時系列変化—地名（市町村名）を中心としたアーカイブ分析から」『ジャーナリズム&メディア』第10号

付表 NHK・民放の主要な震災関連ドキュメンタリー番組（2021年3月放送分）

通番	局	番組枠	タイトル	放送日	時間(分)
1	NHK	NHKスペシャル	定点映像 10年の記録 100か所のカメラが映した“復興”	3月11日	74
2	NHK	NHKスペシャル	徹底検証“除染マネー”	3月10日	49
3	NHK	NHKスペシャル	私と故郷と原発事故	3月9日	49
4	NHK	NHKスペシャル	イナサ 風寄せる大地 16年の記録	3月8日	60
5	NHK	NHKスペシャル	廃炉への道2021 原発事故10年の軌跡	3月14日	60
6	NHK	NHKスペシャル	大震災と子どもたちの10年 いま言葉にできること	3月13日	49
7	NHK	NHKスペシャル	津波避難 何が生死をわけたのか	3月6日	60
8	NHK	クローズアップ現代	追体験 語り部バスの10年	3月2日	30
9	NHK	クローズアップ現代	原発7キロの喫茶店～福島・大熊町 流転と再会の10年～	3月3日	30
10	NHK	クローズアップ現代	娘のもとへ 潜り続けて ～行方不明者家族の10年～	3月4日	30
11	NHK	明日へつなげよう	“助かった命”守るために 震災関連死 10年の教訓	3月7日	48
12	NHK	明日へつなげよう	証言記録 東日本大震災スペシャル 格闘と挑戦の10年、その先に…	3月14日	55
13	NHK	目撃 につぼん	あなたの生きた町で 大槌町職員と遺族の10年	3月14日	35
14	NHK	目撃 につぼん	消えた窯元 10年の軌跡 福島県浪江町	3月7日	35
15	日本テレビ	NNNドキュメント	3・11大震災シリーズ (95) 東日本大震災10年いま、伝えたいこと	3月14日	55
16	日本テレビ	NNNドキュメント	3・11大震災シリーズ きよさんと、ふたつの故郷 山と海と原発と…	3月7日	30
17	日本テレビ	NNNドキュメント	3.11大震災シリーズ きっと、大丈夫。福島で生まれた“きぼう”	3月21日	30
18	テレビ朝日	テレメンタリー	3.11を忘れないSP ゼロから街をつくる、ということ～陸前高田10年の全軌跡～	3月14日	60
19	テレビ朝日	テレメンタリー	3.11を忘れない83 震災家族～遺された父と子の10年～	3月7日	30
20	テレビ朝日	テレメンタリー	3.11を忘れない85 変わる故郷—フクシマはいま—	3月20日	30
21	フジテレビ	ザ・ノンフィクション	わすれない 僕らが歩んだ震災の10年〈後編〉	3月14日	55
22	フジテレビ	ザ・ノンフィクション	わすれない 僕らが歩んだ震災の10年〈前編〉	3月7日	55

※地上波・全国放送の番組（定時枠のドキュメンタリー番組）が対象。

Eテレ、単発のスペシャル番組は除外。